八戸工業大学紀要　第 40 巻（2021） pp.222-224

八戸藩領における雪腐病の記録

星野 保†

Historical Records of Snow Blight in Hachinohe and Relative Domains

Tamotsu HOSHINO†

ABSTRACT

Winter damages presumed snow molds was recorded in Hachinohe Domain on winter barely or wheat in 1754. Winter barley or wheat were important as second crops in a paddy field in the southern part of Morioka Domain. However, an economical importance of these crops decreased in the northern part of Morioka and Hachinohe Domains, and barley and wheat productions were changed to Japanese millet, buckwheat as famine foods and soybeans as a monopoly crops in Towada, Shichnohe Domain.

Ryosen Tomisaka who was medical doctor in Hachinohe and Karumai recorded winter damages in 1754. His father was born in Echizen and educated in Kyoto, therefore they probably recognized the economical impotence of winter barley production in a paddy field and Ryosen described these records.

Key Words: *Aomori, barley, local history, snow mold, whiter wheat*

キーワード：青森県，地域史，冬枯，麦栽培，冬損

1. はじめに

雪腐病は，糸状菌による麦類など積雪下越冬性作物などへの病害の総称である[1]．この病害と思われる現象は，感染増殖が積雪下で進行するため，その状況変化を確認することが難しく，このため我が国では，明治以前から本病と推測される麦類の腐敗現象が確認されていたが，植物の低温に対する生理障害と捉えられ「冬枯」（ふゆがれ）あるいは「冬損」（とうそん）と称された[2]．筆者はこれまでに全国で出版された市町村史を中心に雪腐病に関する調査をおこなってきた過程で[3-5]，国内の記録は，室町時代後期の1538年まで遡ることを示した．さらに近世国内での本病と推定される記録は，岩手県から山口県・愛媛県まで幅広い範囲で記録されていた．これらの記録は，中部以南で多く，現在本病が主に発生する北海道・東北では少なかった．これは，記録数の多い時期が小氷期と一致することから，現在の豪雪地域よりも広い範囲でより多くの積雪があったことや，融雪の遅れによる田植えの遅延を懸念し，水田裏作としての麦作をおこなわない地域があった[6]ためと判断した．

その後，筆者が青森県に研究拠点を移動したことにより，本州最北である青森県の様々な資料を確認することができた．その結果，雪腐病と推定される記録として『津軽の農書』[7]に収録された著者不明『農作物について』（1860年）の麦栽培に「春蒔の種あり，石（こく）もおとれども雪に挽ずる患なし」と記されていることを見出た（筆者が雪腐病と判断した個所に二重下

令和 2 年 11 月 25 日受付

† 工学部生命環境科学科・教授

線を追記した．以下同様）．

また，青森県東部の南部地方では，水田が少なく，平時米飯を食せず，麦・蕎麦・大豆・稗・粟・大根などを混食したことから[8]，米作中心の津軽地方よりも雪腐病の発生が多いと考え，近世の飢饉関連の資料を確認する中で八戸周辺における雪腐病と推定される記述を見出した．

本稿では，これらを紹介すると共に，南部氏が支配した盛岡・八戸・七戸各藩における雪腐病の要因について考察した．

2. 八戸藩領における雪腐病と推定される記録

八戸藩における宝暦の飢饉を記録した『耳目凶歳録』[8]には，1754年の出来事として 「春の雪今至日かと謬またる越路に増る陸奥なれば，さのみ不思議とせさりしに，二月十七日に申刻大地震をびたゞし．漸く垣根の草の萌出る弥生の空は思もよらす，樹々の梢も気色たゝ青麦積雪に推され，此時大半腐果て蛍の種そ蒔にける」と記されている．また，1755年にも「今春も軈（やが）て麦腐て去春思ひに彷彿たり」とあり，いずれも雪腐病を推定させる積雪下における麦類腐敗の記録である．『耳目凶歳録』の著者の富阪涼仙は医師であり，1753年に八戸城下から軽米（現在の岩手県九戸郡軽米町．以下同様に括弧内に現在の地名を示す）に移動した．本書は，青森県三戸郡北川村（南部町）上斗賀の別當家に保管されていた写しを基にしている．積雪下に麦が腐った場所が正確には現在の青森・岩手両県のいずれの場所を記したかは不明であるが，八戸藩内の近距離での出来事であり，これを青森・岩手両県にまたがる記録として判断した．

また，著者の富阪涼仙は，越前の生まれで，京で学んだ医師，富阪涼庵の子である．福井県では1731年[9]に，京都府では 1681年[10, 11]には，同様の記録があることから八戸藩領内では見過ごされていた雪腐病に対して，親族の他地域での経験や知見を基に判断し，記述した可能性がある．特に1754年の記述には“越路”と北陸地方との比較があることに注目したい．

3. 南部各藩における麦類の差異

盛岡藩「御領物産物」には，大麦として早生17，晩生17，小麦として早生21，中生10，晩生21品種が記録されており[12]，多様な麦類が栽培されていたことが判る．享保年中（1716-1736）に記された仙台藩胆沢郡（岩手県奥州市・北上市・金ヶ崎町）大肝入鈴木文書（日記）では，米を含む作付面積の5 – 55%（平均 32%）が大麦であり，小麦が7 －27%（平均 8.4%）と記されており，その重要性が判る[12]．

また，同じく仙台藩江刺郡伊手村（岩手県奥州市江刺伊手）にて1811年に佐川五郎が記した『農業手引草』[13] には，「まず麦は，百姓の米であって，殊にその実取りが大切だ．油断なく上作に作らねばならぬ．当村は隣村より，十日程早く蒔いても，実入りの送れることは，皆のよく知るところである．これは雪が早く降り，遅く消えるせいだ．近年は大雪がないけれども，三，四十年前には，毎年大雪で朽ち損じて，わずかに種麦ばかりを取ったことがある，麦に凶作はないはずなのに，大雪にはこうなるのだから，注意が肝要である．その作柄にもよるが，秋早く蒔いた分は，雪の降らぬ前に繁り，根入りも深かったせいか，全部は腐れなかったが，遅く蒔いた分は無種子になった．だから麦は早く蒔くべきである．」と麦作の重要性と雪腐病への注意を記している．

一方，1847年から15年以上にわたって加筆された淵沢定長による『軽邑耕作鈔』は，九戸の畑作経営を書いた唯一の書とされ，盛岡・八戸藩を通じて唯一の農書とされる[13]．本書では，穀物栽培のなかでこの地方に最適な作物は，粟，稗，大豆，大根であるとし，米，麦の比重が極めて低く書かれている．

さらに緯度の高い十和田市切田村牧田領内の1839年の畑作面積比は，粟25.8%，稗23.9%，大

豆23.3%，蕎麦16.9%，大根8.4%であり，麦は僅か0.8%であった[14].

これらの記録から関東以南で農家において自家用として重要である水田裏作としての麦栽培は，盛岡藩南部では重要視されたが，これ以北では栽培が困難であり，徐々に凶作に強い作物（稗・蕎麦）や，より換金性の高い大豆に換わったことが判る．このため現在の青森県では近世までは麦栽培の比率が低く，記録が少ないと判断した．

一方，前掲の富阪凉仙が記した八戸藩内における雪腐病と推定される記録は，藩内では重要性の低い麦栽培における被害を西日本で一般的な水田裏作の麦栽培の重視し，記述したと判断した．

3. おわりに

これまで南部諸藩の飢饉の資料は様々な形でまとめられているが，植物病害，特に雪腐病について着目し，検討を進めてきた例は筆者の研究以外ない．これまでの文献調査では活字化された記録を主な対象としてきた．このため市町村史等の編集方針により収録されなかった筆者未見の多くの記録があるものと思われる．今後さらに文献調査を進めて，東北地域における雪腐病認識の過程を明らかにしていきたい．

参考文献

1) 松本直幸：雪腐病, 北海道大学出版, 2013.
2) 松本直幸：雪腐小粒菌核病菌の種生態学的研究, 北海道農試研報, Vol. 152, pp. 91-162.
3) 星野保, 浦野光一郎, 五島徹也：広島県北部における雪腐病の記録およびガマノホタケ属担子菌の報告, 高原の自然史, Vol. 18, pp. 1-8, 2018.
4) 星野保：近世日本における冬損・雪腐病とその対策の記録, 土と微生物, Vol.72, No. 2, pp. 90-93, 2018.
5) 星野保：菌は語る ミクロの開拓者たちの生きざまと知性, 春秋社, 2019.
6) 酒井惇一：戦後東北における水田二毛作の展開過程, 農業経済研究, Vol. 22, pp. 1-30, 1988.
7) 葛西善一, 鈴木政四郎, 佐々木隆次, 吉田一郎編：みちのく双書第 36 集 津軽の農書, 青森県文化財保護協会, pp. 181-112, 1993.
8) 青森県立図書館編：南部・津軽藩飢饉史料, 青森県学校図書館協議会, 1954.
9) 福井県編：福井県史 通史編 4 近世二, 福井県, 1996.
10) 郷土史岡田中編さん委員会編：ふるさと岡田中, 岡田中公民館, 1988.
11) 大江町史編纂委員会編：大江町史史料編, 大江町, 1981.
12) 岩手県編，森嘉兵衛監修：岩手県農業史, 岩手県, 1979
13) 江刺市史編纂委員会編：江刺市史 第二巻 通史編 近世, 江刺市, 1985.
14) 七戸町史刊行委員会編：七戸町史第 2 巻, 七戸町, 1984.

要　旨

八戸藩領にて 1754 年に積雪下に麦腐敗の記録を見出した．この記録は，青森県で最古のものである．盛岡藩の南部では水田裏作としての麦栽培は重要であるが，盛岡藩北部から八戸藩ではその重要性が低下し，七戸藩十和田では，救荒作物としての稗・蕎麦あるいは換金性の高い大豆に変化した．1754 年の記録した八戸・軽米の医師，富阪凉仙は越前で生まれで，京で学んだ父を通じて西日本における水田裏作としての麦栽培の重要性を認識し，これまで記録されていない記述を残したと判断した．

キーワード：青森県，地域史，冬枯，麦栽培，冬損